

誠意を持ち快適空間創造

地域の未来を見据えて



菅原吉孝社長

菅原組の歴史は、1916(大正5)年に旭川市旭町1条5丁目創業菅原基七氏によって始まり、基七氏は宮城県古川市出身で、多くの職人を率いて北海道に進出し、地域密着型の建設業を立ち上げた。

当時、北海道の厳しい自然環境に立ち向かいながら事業を進展させることは決して容易ではありませんでした。基七氏は「ガンガン菅原」と呼ばれるほどの頑固で正直な信念を持ち、地域からの信頼を築き上げました。彼の努力と情熱が、同社の基礎を固めたのです。

基七氏の長男である正二氏は16歳で大工として働き始め、父と共に事業を拡大しました。1952(昭和27)年には北海道知事から建設業の許可を取得し、企業基盤をさらに強化しました。

しかし、54(昭和29)年に基七氏が急逝したため、正二氏が2代目の代表に就任します。その後、戦後復興の波を



⑧菅原組 (旭川市)

70年代に旭川市内の電話局で大規模な通信障害事故が発生しました。

背景に事業は順調に成長して



後列右から2人が創業者の基七氏

の時期が108年の歴史の中で一番忙しい時期でした。

63(昭和38)年には法人化を果たし、さらに92(平成4)年には鷹栖町に機械センターを設けるなど事業を拡大。正二氏の後を継いだ長男龍明氏は95(平成7)年に3代目代表取締役に就任し、事業の成長を推進しましたが、99(平成11)年に政治の道を選び退任します。

その後、次男康晴氏が代表目に就任し、2009(平成21)年に本社を現在の旭川市1条通10左10に移転し、札幌支店を開業するなど、道内全体へ事業を広げていきました。

創業以来「誠意をもって快適空間を創造し、感謝の気持ちで地域社会に貢献する」という理念を守り続け、社員一人ひとりの成長を大切にしながら、建設業の発展に貢献してきた菅原組。特に、医療・福祉施設や商業施設の建設・改修において、高度な技術力と迅速な対応で地域社会からの信頼を得ています。

20(令和2)年に5代目代表に就任した三男吉孝氏は、108年で築かれた数々の素晴らしい縁、偶然の巡り合い、そして大切に育んできた人との繋がりを受け継ぎ、人と自然にやさしい企業姿勢を掲げ、持続可能な未来を見据えながら地域との絆を大切にしながら経営を続けています。

技術と信念を次世代に引き継ぎながら、さらなる成長を目指しています。

障がい者雇用拡大目指して 道北あさひかわ支部8月例会

【旭川】道北あさひかわ支部は8月24日、支部8月例会「企業と特別支援学校の皆さーんとの交流会(企業説明会)」を旭川高等支援学校で開催しました。同校や美深高等支援学校など道内8校から生徒、保護者、教員ら約100名が参加し、障がい者雇用に関心のある企業関係者も見学に訪れました。

特別支援学校の生徒と地元企業が相互理解を深め、実習や就労の機会創出を目的に、コロナ禍を経て5年ぶり、3回目の開催。会場には旭川お



各コースで交流を深めました

よび近郊の企業13社が出席し、自社の仕事内容や待遇について説明しました。また、初めて特別支援学校の学校説明アリスを設営し、日本体育大学附属高等支援学校(網走)など4校が取り組みを紹介。企業関係者が、各学校の取り組みや生徒の素質を受け入れ、卒業後の採用について説明を受けました。

参加した生徒や保護者からは「企業の話や説明がなかったら参加してよかった。様々な職種について知り、興味を持つ機会になった」と企業関係者も「障がい者雇用が難しいと感じてきた」といった感想が寄せられました。

障がい者就業委員会では次年度以降の開催も検討しています。

新分野・市場への挑戦に学ぶ 産学官連携研究会HOPE9月例会



報告する櫻井氏(右)と佐々木氏

佐々木曲堀の佐々木嘉久社長は「What's Motion Capture」をテーマに報告。特殊なカメラやセンサーを使用し、3次元データを作成するモーションキャプチャは、アニメ制作等に使用されてきました。技術の進化で無料のプログラムも普及しており、リアルタイム技術で人間の動きをリアルに表現する新しい世界の可能性を語りました。

中学生へ働く楽しさ伝える オホーツク支部総合学習に協力

【北見】オホーツク支部は、8月30日(北見市立南中学校)1年生22名を対象にしたキャリア教育の一環としてワークショップ形式の総合学習「地域の先輩に学ぶ」に協力しました。

はじめに、田村友明支部長が「学校の学びは、大人になるための準備です」と語り、その後、4グループに分かれた生徒は、来場した地元企業4社のもとをローテーション。経営者や若手社員が

ら、地域を支える企業の業務内容や社風、働く楽しさや大変さに耳を傾け、メモを取りながら学びました。

報告を聞いた生徒からは「それぞれにやりがいを感じて働いていることがわかった。大人になり社会に出ることが不安だった。一人ひとりの活躍で企業は成り立っている」と話や聞き、大人になるのが楽しみになったなど、感想が寄せられました。



説明に耳を傾ける生徒

生徒の心に寄り添う教育を

しりべし・小樽支部北後志地区会例会

【余市】しりべし・小樽支部北後志地区会は9月4日、地区例会を開催し、11名が参加。北星余市はこんな学校です。意外と知られてない、北星余市高校の内側」をテーマに今堀浩校長が報告しました。

同校は、地元の公立高校に進学できない子どもたちの学びの場として、1965年に余市町に要請で開校しました。ドラマやドキュメントの影響もあり入学生が増え、熱く語る今堀校長

現在の生徒たちは、集団での関わりを通じて、楽しさや課題を学んでいます。多様な背景を持つ生徒たちが多く中で、寮生活を通じた上級生との関わりや、互いの「教育力」と「生きる力」を大切に、多様性を生かしたインクルーシブ教育が実践されています。

今堀氏は「思春期の課題には、その時期に向き合うことが大切。本校は特別な学校ではなく、互いの違いを認め合い、間違いを繰り返しながら成長していく、昔ながらの学校です」とまとめました。



「北見」オホーツク支部は、8月30日(北見市立南中学校)1年生22名を対象にしたキャリア教育の一環としてワークショップ形式の総合学習「地域の先輩に学ぶ」に協力しました。

はじめに、田村友明支部長が「学校の学びは、大人になるための準備です」と語り、その後、4グループに分かれた生徒は、来場した地元企業4社のもとをローテーション。経営者や若手社員が